

## 令和7年度 奈良市立神功こども園 研究実践概要

園長名 山中 理恵子  
全園児数 148名

## 1. 研究主題 子どもの「声」を聴く保育

—ひと・もの・ことと関わる子どもの姿を読み解く—

## 2. 研究年度 3年度

## 3. 研究主題設定理由

子どもの“ひと・もの・こと”との関わりに見られる表出行為には個々の思いがあり、またそれに関わる保育者の援助や環境構成には、その思いの見取りをもとにしたそれぞれの保育者の捉えや関わりがあり、違いもある。これまでの取り組みで、このそれぞれの子どもの思いや保育者の関わりには、子どもの年齢や発達、遊びや生活経験が大きく関係していることも見えてきた。これらのことを踏まえて、“ひと・もの・こと”への子どもの思いをより詳細に読み解き、発達に応じた援助や環境についてさらなる協議を行いながら、子どもの「声」をもとにした子ども理解と保育の在り方について検討していくこととする。

## 4. 具体的な研究内容

## ①研究のねらい

遊びや生活の中で、子どもが関わる“ひと・もの・こと”に対する「表出行為」に見られる思いを探り子ども理解を深めるとともに、保育者の関わりとその意図を検討し、子どもの「声」を聴く保育の本質を探る。

## ②研究の重点

実践や事例から、子どもの姿を読み解く中で見えてくる“ひと・もの・こと”への子どもの関わり、思いを探り、子どもが心を大きく動かされている姿を職員間での研修を通して共有、検討し、導き出した子どもの思いから年齢や発達の特徴や違いに着目しながら、それらに応じた保育者の関わり（援助、環境）を探る。

## ③活動の方法

- ・0～5歳児の事例を基に、“ひと・もの・こと”との関わりを子どもの思いから読み解き、幼児棟・乳児棟のエピソード研修に各棟の職員が参加し、月1回エピソード研修を実施する。
- ・各事例については、子どもの思いや行動が大きく動いたと考えられる箇所に下線、保育者の関わり（環境、援助）に点線を引き、エピソードにおける心の動きのポイントとなった表出行為に網掛けをする。上記内容を検討、分析し、各エピソードにおいて子どもの心を動かす一要因と考えられる保育者の関わりを□にまとめ、子どもの育ちや学び、経験を○の中に示す。
- ・協議においては、各担当学年の発達を踏まえて意見交流を行い、子どもの発達段階を意識することに繋げる。また、エピソードの中の子どもの姿や保育者の援助、環境を1つ1つ分析し、発達に応じた保育者の意図を探る。
- ・各学年のエピソードから事例を選出し、そのエピソードにおいて、子どもが関わっている「もの」に注目して、子どものその「もの」への関わり方や思い、保育者の援助や環境について0～5歳児それぞれの年齢に当てはめて推察し、職員間で共有する。各年齢の子どもの「もの」との関わりから発達を捉え、その経過を探りながら、乳幼児期の発達理解に繋げる。

## (1) エピソード研修

### 事例1 0歳児7月「お水、ジャー！」

タライの水に触れて遊んでいたA児(11ヶ月)。タライの中に保育者がペットボトルを半切して底に穴を開けて作ったシャワーを入れると、すぐ手に取った。最初は①それを水に入れてじっと見ているだけだったが、a保育者がシャワーをして見せるとジャーっと水の音が鳴り、A児は水が流れ落ちるのをじっと見ていた。そしてA児も水の中にペットボトルを入れて、上にあげるといった動作を繰り返すようになった。A児の動作では水が出てこなかったが、ふとした時にペットボトルが水面に落ちゆっくり持ち上げたことでシャワー状に水が出てきた。「ジャーってでてきたね！」と保育者が笑顔で言うと②ニコッと笑って遊び続けた。

一緒に遊ぶ  
(初めての“もの”との出会いのきっかけ)

見る・触るなどの五感を通しての「もの」との関わりに繋がる

<考察> 水遊びを始めたばかりで、水に手を入れたり水面を叩いたりして水の感触を楽しんでいたA児。ペットボトル玩具を見るのも初めてで、下線①では、玩具の使い方が分からず、水中に玩具を入れ、じっと見ていたと思われる。aでは、保育者が自分と同じ玩具を水から持ち上げるとシャワーが出てきたことで、保育者の動作に興味をもち、模倣したのではないだろうか。模倣と偶然が重なって出たシャワーだったが、下線②の表情は、A児が見たことを保育者が受け止め、笑顔で返したことで、A児の中で楽しいという経験となり、もっと水遊びをしたいという思いに繋がっていくと考えた。



### 事例2 1歳児5月「見たいな。もっと近くに・・・」

保育者がシロツメクサにとまる小さなチョウを見つけB児に知らせると、B児は①じっと目を凝らしてチョウを探し、見つけて近づいていった。B児が②近づいていくと、チョウは飛んでいき、その行為を数回繰り返すうちに、遠くに飛んでいった。今度はB児の近くの花にとまる小さな虫を保育者が見つけ、aそっと近づいてしゃがみ③「ここにも虫さんいるよ」と指差しして知らせた。すると、B児は少し離れたところから、再び目を凝らして虫を探した。④「虫さんいた？」と尋ねると、視線を虫に向けたまま大きく頷いた。B児は⑤両手で丸をつくらせて双眼鏡のようにし、虫との距離を保ったまま見始めた。b⑥「いいね」とB児の双眼鏡を真似た。そしてc隣で虫を見ながら⑦「お花のジュース飲んでるね。暑いから喉乾いてるのかな」と言うと、じっと見たまま2回小さく頷いた。そして⑧双眼鏡をやめ、虫にそっと近づき、じっと見ていた。

声掛け  
(虫への興味の芽生えとなるきっかけ)

もっと近づいて見たい好奇心の芽生えに繋がる

<考察> チョウを近くで見ようと近づいたが、飛んでいってしまった経験から新たな虫にはすぐに近づかず距離をとったりこの虫に対して用心する気持ちから芽生えたのではないかと推察する(下線①②)。それでもこの虫をよく見たいという思いから、双眼鏡の玩具を覗いた遊びの経験や保育者や母親が手で双眼鏡をつくらせて見ていた記憶とも繋がり、自分の手で双眼鏡をつくるという行動になったのではないと思われる(下線③)。保育者はB児と同じこの行動をすることで、手の双眼鏡から見る虫は、よりフォーカスされて見えると気付いた。そこで、虫への親しみの気持ちに繋がられるようにと、保育者はB児に「花のジュースを飲んでる」という虫の様子を擬人化した言葉を掛け、これがきっかけとなって「もっと近づいて見たい」という気持ちに繋がり、虫との距離を縮め、見るという行動となった(下線④)と考えられる。



### 事例3 2歳児10月「ないっ！！どこいったん？」

保育室のカーテンに夕方、窓から光が差し込んだ。近くでままごと遊びをしていたC児は①ふと光に気付き、顔を近づけ、真剣な表情で見ていた。その場にいた保育者に②驚いたような表情を見せたので、a保育者もC児と同じように驚いた表情を見せた。その後C児は③もう一度光に視線を戻し、少しずつ指先を光に近づけた。指先で光を擦ったり、指先をじっと見たりした後、カーテンを少し揺らし始めた。そこにD児がやってきて光を触ろうとし、揺れていたカーテンを開けた。C児が立ち上がった時に背中に光が当たり、光が消えたように見えた。C児D児④「どこいったん?」「ない」とつぶやき、カーテンを動かして後ろを覗いたり、場所を移動したりした。b⑤「どこいったんやろうな?」と一緒に探したり、様子を見守ったりした。その後二人は繰り返し光を探したり触れたりして遊んでいた。

共感の表情・声掛け  
(子どもの発見を受け止める・安心感)

見つけた「もの」への興味から確かめの行動に繋がり、好奇心が芽生える

<考察> 普段遊んでいる場でいつもと違うことが起こり、「なんだろう？」と覗き込んだり触れるかどうかを確かめようとしたりする姿（下線①）が見られた。保育者が、C児の気付き（下線②）に共感する表情を見せたことにより、更なる光への興味に繋がっていったと考えられる。またD児がその場に表れたことによって光っていたものが消える現象が起こり、C児の不思議な思いが「どこいったん？」という言葉で表され、C児の心がより動かされたのではないか。また、保育者が一緒に光を探したり、消えた不思議さに共感したりしたことで、C児D児にとっては、保育者がいつも同じように感じてくれているという安心した気持ちになり、見え隠れする光を探すことを繰り返す姿となったと考える。



#### 事例4 3歳児5月「カタツムリのさんぽ」

E児がワゴンに虫かごを乗せて引っ張り、真剣な表情で歩いていた。保育者は様子を見守りながら、E児が足取りを緩めた際に「何してるの？」と尋ねた。E児は少し自慢げに「カタツムリ、お散歩してるの」と答え、「お散歩行って来ます」とその場から勢いよく出発した。その様子に①「カタツムリさんびっくりしちゃうよ」と声を掛けると、①E児は一度足を止め、ワゴンを見つめて数秒後にはゆっくり歩きだした。しばらくすると、E児はワゴンを置いて砂場の方へ移動し、②お椀に砂をたくさん入れて飼育ケースの横にそっと置いた。c①「それ何？」と尋ねると「カタツムリのごはんだよ」と言ったので「ご飯作ってあげたんや！カタツムリさん、嬉しいね」と答えると、E児はニヤリと笑った。

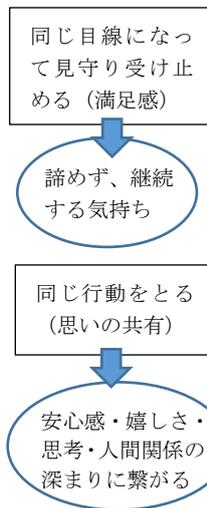


<考察> E児はカタツムリを乗せてワゴンを引っ張る行為自体を楽しみ、遊び仲間として散歩をすることに喜びを感じていた。保育者はその気持ちを大切にしつつも、「びっくりしちゃうよ」と声を掛けたことで、カタツムリに意識が向き、E児なりに考え、下線①でスピードを変化させたと思われる。カタツムリに親しみ、遊び仲間のような思いで関わる姿や、下線②のカタツムリもお腹が空いただろうというアニミズム的な感覚から、E児は自分自身とカタツムリを同一視し、ごっこ的な遊びの中の“もの”として捉えた関わりをしたと推察できる。



#### 事例5 4歳児6月「お豆がとりたいの」

FG児が築山の上で、シャベルの持ち手を紅葉の木の枝にひっかけて引っ張っていた。すると、F児が「先生見て！お豆（紅葉の種）取れた。」と①ニヤッと笑い保育者に見せた。①「ほんとだお豆！どうやって取ったの？」と聞くと、「こうやって！」とシャベルで枝を引っ張った。その後なかなか掴むことができず、②「取れない、取れない」と怒ったように言うF児に、近くを通ったH児が「はい！」と手で葉っぱを掴みF児に近づけた。③F児はその葉をちらっと横目で見ただけで、H児の声掛けには反応を示さず、シャベルを使って一人で取ろうとし続けた。何度か繰り返すうちに、F児「先生、取って！」と言うので、④「わかった。先生もやってみる！…難しいなあ」と言いながらシャベルで同じ様にしていると、隣でシャベルですっと葉をついていたG児が「ほら見て葉っぱ、落ちた！」と保育者に笑いながら言った。④「ほんとや！落ちたね！」と言うと、F児は④「あ！」と言って落ちた葉を手に取り、豆の部分だけをちぎっていた。④「お豆あったの？」と聞くと、F児は保育者に視線を向けずに、豆をちぎりながら「なんとか見つかった」と独り言のようにつぶやいた。



<考察> 慣れ親しんだ築山という場所、じっくり見る力が育ってきた4歳児であることに加え、お豆を見つけ、保育者とやりとりをしたことでより興味関心が高まったと考える。使い慣れたものを工夫して使い、お豆を取ることができたことを頼りに、うまくいかない（下線②）ながらも同じ方法で何度も挑戦していた。また、下線③の姿は、F児の取り方や取ることへの強い思いがあり、自分なりの目的をもって遊ぶ姿だと捉え、同じ様にシャベルを使うという援助を行った。F児下線④の姿はお豆を手に入れたいというF児の気持ちと共に、G児が落とした葉や何度もシャベルで挑戦し続けたことでの満足感、また保育者の反応など、様々な要因とタイミングが重なったからだと考えられる。友達存在を感じつつも、F児のG児・H児・保育者に対する意識の違いを感じ、

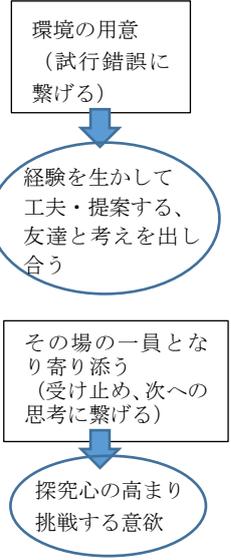


自分のしたいことに強い思いで行動し、夢中になる F 児の姿が現れていた。

### 事例6 5歳児5月「そらまめくんのベッド、浮かぶかな？」

絵本「そらまめくんのベッド」からそらまめくんのベッドづくりが始まり、水に浮かぶ素材を探し始めた。段ボールが浮いたのでハサミをのせて試してみたが、沈んでしまった。

他に“良いもの”はないかと素材箱の中を探していると、①I児「あのさ、プラスチックはどう？ペットボトルとか？」J児「これはいけると思う！」と、前のめりに話し、納得した様子で自信あり気な子ども達。ペットボトルを浮かべると、○「浮いた～!!!」と大きな声をあげ喜んだ。そこで、再びK児がハサミを乗せると、ペットボトルが回転しハサミが水中に落ちた。予想外の出来事に、子ども達は○「ええー!」と驚き残念がっていた。すると、②K児「2個にしてみたら？」と製作コーナーから急いでガムテープを持ってきて、K児「ここ持ってて」と保育者に言い、2本のペットボトルを巻いた。水に浮かべると、ペットボトルはハサミも乗せて浮かんだ。○「よっしゃー!!!」「全然っ、落ちひん!」と大喜び。保育者も一緒に喜んだ。③L児「これも乗せたら？」と素材箱から筒(重さや高さのあるもの)を選んで乗せた。その筒がハサミの上に乗ったことで一段と子ども達の気持ちは高まり、素材箱からカップや皿などを取ってきて③K児「じゃあさ、これは？」と試していき、どんどん積み重ねていく様子に手を叩き友達と顔を見合わせて一緒に喜んでいた。



<考察> 絵本の世界に入り込めたことで、イメージが共有でき、試したい気持ちに繋がった。思いつきを言葉にして(下線①②) 試し、結果が出る度に対応策を考えることで、同じ素材でも数の違いで安定感が増すことを体験を通して実感していた。ハサミの上に更に筒が乗った瞬間からは、“積み”という新たな面白さが生まれ(下線③)、保育者もその展開と一緒に楽しむことで、一人一人が次々に様々なものを乗せて試すという遊びが盛り上がり、結果的にその後の活動への期待にも繋がった。



この場面でも見られるように、達成感や充実感、満足感、葛藤などを味わいながら目の前の課題を乗り越える経験を重ねている。

### (2) 各年齢における「もの」に着目した援助・環境の検討

2・4歳児のエピソードから「光」「豆」を題材にして0歳～5歳児それぞれがどのようにそれらに関わるのか、心の動きや発達に視点をおいて推察、検討した。それらをもとに各年齢にあった援助や環境を話し合い表にまとめた(右表参照)。

表:2 歳児「光」についての検討

| 年齢  | 子どもの様子  | 保育者の援助  | 環境  |
|-----|---|---|---|
| 0歳児 | 光を興味する様子がある。  | 光を照らす様子を見せ、興味を促す。   | 光を照らすための道具を用意する。  |
| 1歳児 | 光を興味する様子がある。光を触ろうとする。   | 光を照らす様子を見せ、興味を促す。光を触る様子を見せ、興味を促す。                                   | 光を照らすための道具を用意する。光を触るための道具を用意する。                                 |
| 2歳児 | 光を興味する様子がある。光を触ろうとする。光を動かそうとする。                                   | 光を照らす様子を見せ、興味を促す。光を触る様子を見せ、興味を促す。光を動かす様子を見せ、興味を促す。                  | 光を照らすための道具を用意する。光を触るための道具を用意する。光を動かすための道具を用意する。                 |
| 3歳児 | 光を興味する様子がある。光を触ろうとする。光を動かそうとする。光を動かす様子を見せ、興味を促す。                  | 光を照らす様子を見せ、興味を促す。光を触る様子を見せ、興味を促す。光を動かす様子を見せ、興味を促す。光を動かす様子を見せ、興味を促す。 | 光を照らすための道具を用意する。光を触るための道具を用意する。光を動かすための道具を用意する。光を動かすための道具を用意する。 |
| 4歳児 | 光を興味する様子がある。光を触ろうとする。光を動かそうとする。光を動かす様子を見せ、興味を促す。光を動かす様子を見せ、興味を促す。 | 光を照らす様子を見せ、興味を促す。光を触る様子を見せ、興味を促す。光を動かす様子を見せ、興味を促す。光を動かす様子を見せ、興味を促す。 | 光を照らすための道具を用意する。光を触るための道具を用意する。光を動かすための道具を用意する。光を動かすための道具を用意する。 |
| 5歳児 | 光を興味する様子がある。光を触ろうとする。光を動かそうとする。光を動かす様子を見せ、興味を促す。光を動かす様子を見せ、興味を促す。 | 光を照らす様子を見せ、興味を促す。光を触る様子を見せ、興味を促す。光を動かす様子を見せ、興味を促す。光を動かす様子を見せ、興味を促す。 | 光を照らすための道具を用意する。光を触るための道具を用意する。光を動かすための道具を用意する。光を動かすための道具を用意する。 |

## 5. 研究の成果

- 子どもの“ひと、もの、こと”との関わりに視点をおいて心の動きや思いを読み解いてきたことで、各年齢発達での特徴を捉えることができた。さらに、その心の動きや思いに対する保育者の関わりにも着目することで、保育者の援助や環境が、年齢発達を踏まえた保育者の意図に応じたものであることが明らかになった。
- 1つのものに各年齢の子どもがどう関わるかを探ることは、発達の過程を捉えた保育者の関わり(援助、環境)が大切であることを再確認することに繋がった。また、0歳児からの経験の積み重ねが子どもの主体的な“ひと・もの・こと”との関わりのお土台となり、更なる思考と試行、想像と創造を繰り返し探究心が高まる等の子どもの育ちや学びに繋がることが分かった。

## 6. 今後の課題

子どもの“ひと・もの・こと”との関わりにおける保育者の環境・援助の関係性や、状況や発達に応じた保育者の意図の違いを再確認し、子どもの育ちにそれらが重要であることを改めて認識することができた。今後も、各棟で計画的かつ継続的に研修を進めながら、状況や発達を踏まえたより具体的な関わり方(言葉掛けの内容や見守りの距離感など)として、検討していく必要があると感じた。子どもの実態から年齢発達に応じた保育者の関わりについて研究し、保育実践のさらなる充実を図っていきたい。